

直音の拗音化と拗音の直音化に関する研究

— 「20分」と「宿題」の発音の動態 —

尾崎 喜光^{*}

A Study on Sound Change Which Contains a Semi-vowel [j] and Not Contains it in Modern Japanese : “*nijippun*” (20 minutes) and “*shukudai*” (Homework)

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

『旧約聖書』の「出エジプト記」に出てくる「十戒」の意味を調べようと思い『広辞苑第七版』（2018年）を開いて「じゅっかい」の項を見ると、「同音」の「述懐」はきちんと載っているものの、「十戒」は「⇒じっかい」とあり「じっかい」を見るようにという指示があることに驚く人がいるかもしれない。「十戒」を「じゅっかい」と発音し、それが正しい発音だと思いつつ何ら疑うことのない人にとっては驚きであろうが、じつは本来の発音は「じゅっかい」ではなく「じっかい」であるためこうなっているのである。

「十」のかつての発音は「ジフ」であり、従って出だしの音も「ジュ」ではなく「ジ」であった。「十」の直後に無声子音 [p] [t] [k] [s] [h] で始まる助数詞等を伴う場合は、「ジフ」の「フ」はその後促音化したのに対し、そうでない場合は促音化せずに母音「ウ」がしっかりと発音されていた。しかしその後、後者のケースでは、「フ」の子音 [ϕ] が脱落するとともに母音「ウ」が1拍前から先取りして発音される変化が生じ（つまり [iu] → [uu]）、それとともに母音「イ」も半母音に後退することにより（つまり [i] → [j]）、1拍目が「ジュ」となったものと考えられる（母音連続の部分は [iu] → [juu]）。これはちょうど、動詞「言う」を [iu] から [juu] にする変化と同様である。^{注1}

つまり「ジュ」の方がじつは特別な発音なのである。しかしながら、助数詞等を伴わない「十」は単独でも用いられるいわば“基本形”であることから、「十戒」や「十分」などにも「十」の発音への類推が働き、その結果「ジュツカイ」「ジュツプン」という発音が成立したものと考えられる。本来は直音の「ジ」であったものが拗音の「ジュ」で発音されるようになることから「拗音化」と見ることができる。

一方、これと逆の現象も見られる。つまり、本来は拗音「シュ」「ジュ」であったものを直音「シ」「ジ」で発音する「直音化」である。たとえば「新宿」を「シンジク」、「宿題」を「シクダイ」とする発音である。

本稿は、こうした相反する方向への変化がそれぞれ現在どの程度進んでいるのか、ある

キーワード：発音の変化、ジとジュ、シュとシ

Keywords : change of pronunciation, “zi” and “zju”, “shu” and “shi”

※ 本学文学部日本語日本文学科

いは残存しているのかについて、全国および特定地域を対象とした多人数調査の結果から明らかにすることを目的とする。

2. 本稿で分析対象とするデータ

本稿で議論の根拠とするデータは次の調査により得たものである。いずれも筆者がたずさわった調査である。このうち(1)と(2)は、実査を調査会社に委託して行なった。

- (1) 全国での多人数調査(2009年実施、20歳～79歳の男女803人が回答)^{注2}
- (2) 北海道(札幌市・釧路市・富良野市)における多人数調査(2011～12年実施、15歳～79歳の男女各地点206人が回答)^{注3}
- (3) 札幌市での多人数調査(1985年実施、12歳～69歳の男女258人が回答)

それぞれ説明を少し加える。

(1)と(2)は国立国語研究所の調査研究の一環として実施したものである。このうち(1)の調査の企画・実施は、当時所員であった筆者が主担当者として行なった。回答者は層化二段無作為抽出法により抽出した。

(3)は筆者の個人研究である。単語アクセントの共通語化をとらえることを主たる目的とする調査であったが、「20分」を「ニジッポン」と発音するか「ニジュッポン」と発音するかについても調査した。回答予定者は、住民基本台帳を閲覧し、登録時までずっと札幌市で生育したという条件にあてはまる市民を無作為に抽出した。札幌市生育者に限定したのは、札幌市のコアの市民のアクセント等の変化をとらえることをこの調査の中心的な目的としたためである。通常の無作為抽出では回答者が少なくなる高年層も一定の回答者数を確保すべく、各年齢層はおおよそ同数になるよう調整して抽出した。従って、回答者全体の数値は札幌市生育者全体を正確に反映しているわけではない。むしろ、年齢層による違いから言語変化を読み取る精度を高めることを優先した。なお、中学生と高校生は学校を通じて回答者を得た。それらを除く面接調査の達成率(回収率)は40.2%であった。

以下、調査結果を見ていく。

3. 調査結果

3.1. 直音の拗音化……「20分」の「ジ」の発音

(1)の全国調査と(2)の北海道調査では、調査会社の調査員に「18分、19分、その次は…」と質問してもらうことで回答者に「20分」と発音させた。調査員には録音までしてもらい、事後に筆者がそれを聞き取ってデータ化した。また、(3)の札幌市調査では、「あと20分で夕張に着くぞ。」と書かれたカードを回答者に読んでもらうことで「20分」の発音をさせた。これも事後に筆者が録音を聞き取ってデータ化した。なお、この文脈としたのは、北海道の地名「夕張」と動詞「着く」のアクセントもあわせて見るためである。

(1) 全国調査の結果

全国調査の結果は図1のとおりであった。なお、録音の失敗や無回答、適切な回答が得られなかったケース(たとえば「20分」の「分」を省略した「20」という回答)もあったため、有効回答は763人である。また、首都圏(東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県)については、これと全く同じ調査をさらに122人に対し実施し、計317人から有効回答を

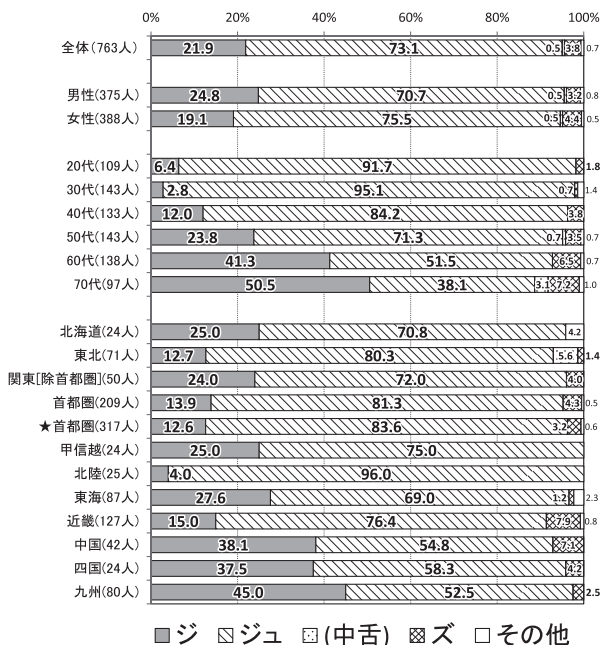


図1 「20分」の「ジ」の発音 (全国)

得た。首都圏の状況についてより高い精度で見るときに参照するためである(グラフでは「★首都圏 (317人)」として示した)。調査の詳細については、本調査の最初の分析論文である尾崎喜光 (2015) で報告している。

グラフのうち「全体」を見ると、「ニジッポン」という本来の発音をする人は約2割、「ニジュッポン」という新しい発音をする人は約7割で、現在では「ジュ」の発音がかなり定着していることが確認される。なお、数値は非常に小さいが、完全に「ズ」と聞こえる「ニズッポン」という発音をした者も4%ほどいた。また、これも数値はきわめて小さいが、中舌母音の [zi] で発音した者も東北地方等にいた。

男女別に見ると、男女ともに「ジュ」の発音がきわめて優勢であるが、その傾向は女性において多少強く現われる。

年齢層による違いが顕著に見られる。70代では「ジ」が約5割、「ジュ」が約4割であり、本来の「ジ」で発音する人の方が多い。これが若年層になるに従い「ジ」はほぼ一貫して減少し、逆に新しい「ジュ」がほぼ一貫して増加する。とりわけ30代以下では本来の「ジ」は1割を切り、ほとんどの人は「ジュ」で発音している。後に示す札幌市での実時間比較で見ると、時間の経過に伴う個人の中での発音の置き換えはほとんど見られないと推測されることから、この年齢差は、「ジ」から「ジュ」への現在進行中の言語変化を反映している面が非常に強いものと考えられる。とりわけ30代以下は「ジュ」の発音がほぼ定着し、変化完了の一手前まで来ているものと考えられる。

地域別に見ると、どの地域も新しい発音の「ジュ」の方が優勢であるが、本来の「ジ」の数値は中国・四国・九州において他の地域よりも高い。これらの西日本では「ジ」が保たれる傾向が見られる。とりわけ九州では半数近くの人が「ジ」を使っておりよく保たれ

ている。ただしこれがどのような要因によるのかは現在のところ十分わからない。

丹保健一（1991）は、「十戒」のような「十」を含む語の読み方について、中世・近世に成立した日本語辞書を調査したところ、いずれも「ジツ」があるのみで「ジュツ」の例は見られないことを報告するとともに、「ジツ」と「ジュツ」の地域性（地域差）の有無を確認すべく、語頭に「十」を持つ地名の読みについて『現代日本地名よみかた大辞典』（1985年）により調査している。それによると、「ジツ」（「ジュツ」も併記されているのは誤りか）の読み・発音はやや中部日本に多いかという程度で、地域性（地域差）については明確な相違はないという結論を得ている。実際の発音を対象とした本調査においても、顕著と言えるほどの地域差はやはり認められないものの、「ジ」の発音は中部日本というよりも西日本に多い傾向が認められる点は異なる結果であった。

なお、新しい「ジュ」の発音は都市部に多いのではないかと推測したが、「首都圏」（2種）や「近畿」の「ジュ」の数値は全国平均よりも多少高い程度にとどまり、顕著と言えるほどの違いはない。

ただし、年齢層別に見ると、上の年齢層においては、「ジュ」への変化が都市部で多少先行しているようである。首都圏について、全国平均と比較する形で「ジュ」の数値を示すと図2のとおりである（図1の「★首都圏（317人）」の方を示す）。70代から50代までは、首都圏の「ジュ」の数値は全国平均よりも1～2割高く、「ジュ」への変化が多少先行していることが確認される。ただし、全国において「ジュ」への変化が完了の一步手前となる30代以下では、両者の数値的異なりは解消される。

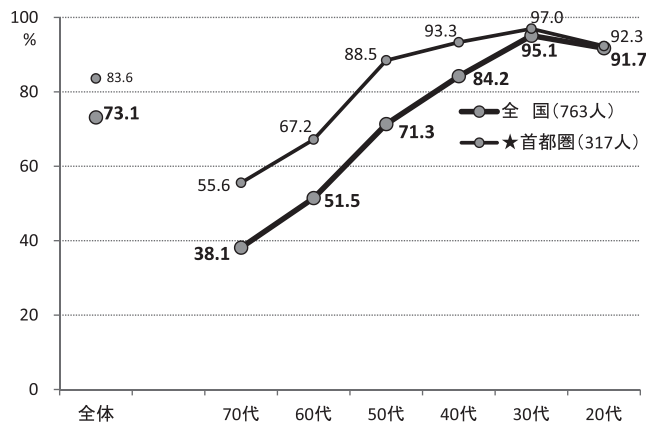


図2 「20分」の「ジュ」の全国と首都圏

首都圏におけるこうした変化については、久野マリ子編著（2018）による2つの年齢層を比較した言語地理学的研究がある。東京都および隣接する千葉、埼玉、山梨の各県の一部の250地点について、その土地生え抜きの高年層（大正15年以前の出生者）と若年層（昭和39年～49年の出生者）の話者（各地点・各年齢層1名ずつ）を対象に、平成元年から平成4年にかけて調査した結果の一部を地図化して示しているが、この調査項目の一つに「10分」の発音がある。資料を見ると、高年層ではどちらかと言うと「ジッポン」の地点数が優勢であるのに対し、若年層では「ジュッポン」の地点数が非常に優勢となっている。

このように、地点数という点からも、首都圏では本来の「ジ」が縮小し「ジュ」が一般化しつつあることが確認される。

こうした変化は首都圏のみならず他の地域にも認められるようである。田野村忠温(1990)は、近畿の府県を主たる出身地とする大学生・短大生122人に対し実施した調査(短文に含まれたある語をどう発音するかについて仮名で回答させた調査)の結果を報告しているが、「十」が促音化する語については、「じっ」3%、「じゅ」97%であり、本来の言い方よりも「じゅ」の方が圧倒的に多かったとする。当時の回答者は、本調査で言えば40歳前後に相当する人々であると考えられるが、40代の全国平均が8割超、30代のそれが約95%であることから考えると、納得のできる数値である。

「ジ」から「ジュ」への変化が生じた原因についてはいくつか考察がある。

斎賀秀夫(1977)は、現在では一と言っても今から40年ほど前の“現在”であるが一「十中(八九)」を「ジュッチュウ」と発音する人がかなりいるとした上で、これは「十」の字音「ジュウ」を強く意識するあまり誤った類推をした結果によるものであろうとする。

文化庁編(1995)は「十四」等の「十」の発音について解説している。漢字音の系統からすれば、「十」の字音は「ジフ」であるから「ジッ」に変化するのが本来であり、キリシタン資料にも「ジュッ」に当たる発音は示されていないことから当時は「ジッ」と発音されていたとするとともに、その後「ジュッ」という発音が生じたのは、「十」の字音「ジュウ」を意識することから生じた誤った類推によるものと思われると解説する。

「ジ」から「ジュ」への変化についての合理的説明はこれ以外に考えにくいことから、先行研究が指摘するように、助数詞等を伴わずに単独でも用いられることからいわば“基本形”と意識されやすい「十」の発音への類推から、「ニジュッブン」という発音が成立したものと考えられる。

(2) 北海道調査の結果

北海道調査の結果は図3-1～図3-3のとおりであった。^{注4}

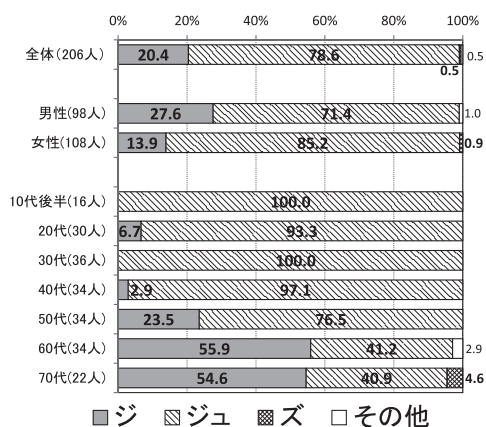


図3-1 「20分」の「ジ」の発音(札幌市)

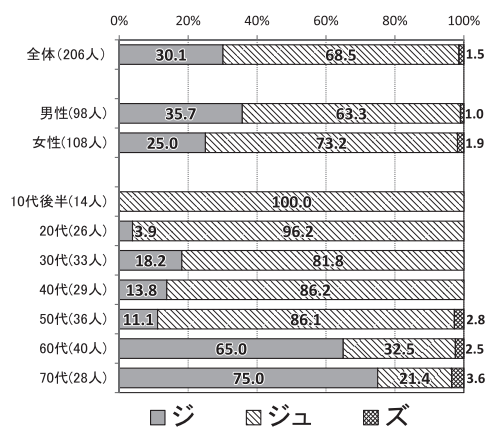


図3-2 「20分」の「ジ」の発音(釧路市)

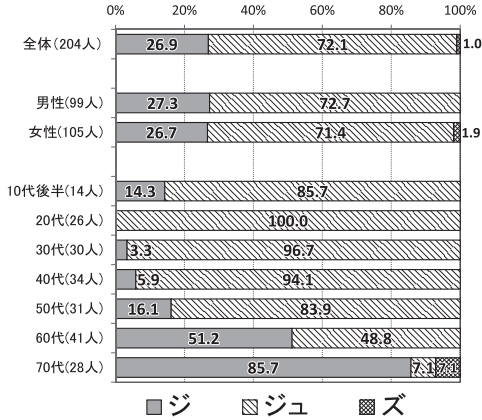


図 3-3 「20分」の「ジ」の発音 (富良野市)

いずれの地域も、全体としては本来の「ジ」よりも新しい「ジュ」の方が優勢であり、「ニジュッポン」という発音は北海道各地でかなり定着していることが確認される。地域別に見ると、「ジュ」の発音は札幌市で最も高く約8割に達する。3つの地域を平均すると7～8割であるが、この数値は、先に見た全国調査の「北海道」や全国の平均と大差がない。

男女別に見ると、男女とも「ジュ」の発音はきわめて優勢であるが、札幌市と釧路市では、先に見た全国調査と同様、その傾向は女性においてやや強く現われる。

年齢層による違いが北海道でも顕著に見られる。いずれの地域も60代以上では、新しい「ジュ」よりも本来の「ジ」の方が優勢である。とりわけ70代ではその傾向が顕著に見られ、「ジ」の数値は釧路市で75.0%、富良野市では85.7%にまで達する。本来の発音が非常に一般的であった地域・年齢層である。

これが若年層になるに従い「ジ」はほぼ一貫して減少し、代わって新しい「ジュ」がほぼ一貫して増加する。とりわけ60代から50代にかけての変化が著しく、50代以下では新しい「ジュ」の発音が一般的となる。従来の「ジ」で発音する人の割合は、札幌市と富良野市では40代以下で、釧路市でも20代以下で、一部を除き1割を切り、ほとんどの人は「ジュ」で発音している。変化完了の一手手前にまで来ているものと考えられる。

この「ジュ」の発音について、北海道の3地域と全国平均とを比較して示したのが図4である。

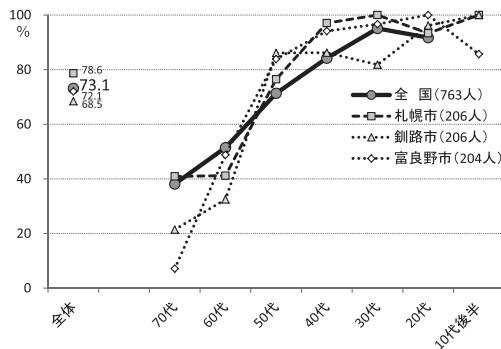


図 4 「20分」の「ジュ」の全国と北海道

全国平均と比較すると、グラフ左端に示した「全体」の数値に大きな違いはない。

年齢層別に見ると、若年層になるに従い数値がほぼ一貫して上昇する傾向は全てに共通しており、また各年齢層の数値も極端な異なりはない。ただし、70代においては、富良野市と釧路市で「ジュ」の数値はかなり低く、その傾向は60代の富良野市と札幌市でもある程度認められる。これに対し、その下の50代・40代では逆の傾向が認められる。その結果、60代から50代にかけての変化が全国平均よりも劇的である点が北海道の特徴として注目される。

北海道のうち札幌市では、1985年にも「20分」の発音を調査している。この時期から今回の調査時期にかけてどのように発音が変わったかを重ね合わせて示したのが図5-1である。ただし、1985年の調査では、生まれてからずっと札幌市在住の者を調査対象としたことから、今回の調査については、それとある程度比較しうよう、回答者206人のうち北海道出身者174人を抽出して分析しなおした。属性が完全に同じではないが、できるだけ近いものとした。

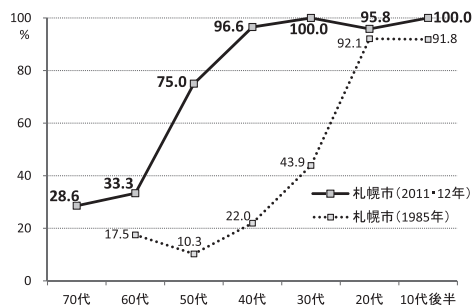


図 5-1 「20分」の「ジュ」(1) (札幌市)

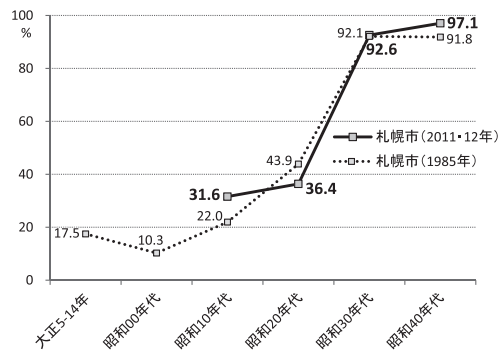


図 5-2 「20分」の「ジュ」(2) (札幌市)

グラフ中に点線で示したのが1985年の調査結果である。これによると、「ジュ」の発音が定着しているのは当時の20代以下のみであることがわかる。これに対し、グラフ中に実線で示したのが今回の調査結果であるが、「ジュ」が定着しているのは40代以下である。つまり、「ジュ」が定着している年齢層がこの間に約20歳上昇している。今回の調査の20代以下は、1985年の時点から「ジュ」がかなり定着しているため変化はほとんど認められないが、30代～50代では数値の上昇が著しい。「ジ」から「ジュ」への変化は、とりわけこの年齢層において大きく進行したことが確認される。

このように、30代～50代において「ジュ」への変化が大きく進行したのは、若年層であったときにすでに「ジュ」と発音していた人の割合が多く、その状態がそのまま維持された結果こうなった可能性がおおいに考えられる。つまり、個人レベルでは変化がなかったけれども、世代のシフトや入れ替えに伴い、社会全体としては変化が生じたという可能性である。この2つの調査の実施時期の間隔は約25年あるので、かつて20代であった人たちの今回の調査時点での年齢層は40～50代、10代であった人たちは30～40代である。図5-1の20代・30代をその分だけ左側にスライドすると、おおよそ実際の数値と重なりそうである。

そこで、このことをより正確に確認するため、調査時点での回答者の年齢層ではなく、10年刻みの元号による回答者の生年層別に組み替えて示したのが図5-2である。なお、1985年の調査では、たとえば60代は大正5年から14年生まれに該当するなどの事情から、グラフは図5-1と全く同じである。一方、今回の調査では、区切りとなる年齢が年齢層別グラフと異なるため、先のグラフと数値が異なる。

2つの調査が重なるところは、生まれが「昭和10年代」から「昭和40年代」までであるが、2つの線はおおよそ重なっていることが確認される。つまり、同時期に出生した回答者群という点から見るならば、この約25年の間にほとんど変化が見られなかったということである。同一個人を追跡調査したわけではないため確実なことは言い難いが、このことは、「ジ」から「ジュ」への変化は、約25年の年月を経ても、個人の中では基本的に生じないということを示唆するものと考えられる。逆に言えば、「ジ」から「ジュ」への変化は、その社会の世代の入れ替え、すなわち世代交代により進行し定着に向かうところがきわめて大きいものと考えられる。

3.2. 拗音の直音化……「宿題」の「シュ」の発音

拗音の直音化については、全国調査でのみ調査項目とした。調査会社の調査員には「学校の先生から出されて家でやる勉強は…」と質問してもらうことで、回答者に「宿題」と発音させた。先の「20分」と同様、調査員には録音までしてもらい、事後に筆者がそれを聞き取りデータ化した。

結果は図3のとおりであった。有効回答は760人である。

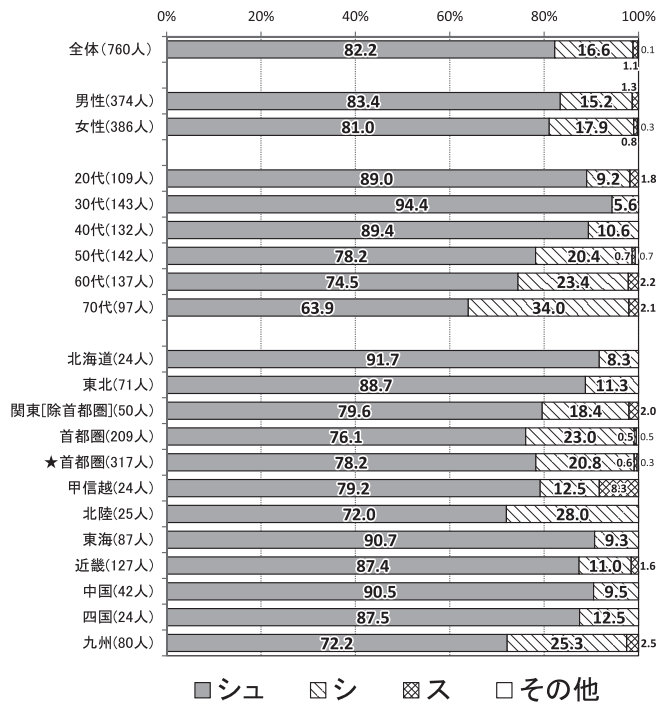


図6 「宿題」の「シュ」の発音 (全国)

「全体」を見ると、「シクダイ」という本来の発音をする人は約8割、ここから変化したと考えられる「シクダイ」という発音をした人は約2割であり、本来の「シュ」の発音がきわめて多いことが確認される。歴史的变化という点から考えるならば、もともとは「シクダイ」と発音されていたところに直音化した「シクダイ」という発音が生じ、それが再び本来の「シクダイ」に回帰したのがこの数値であると考えられる。

なお、「シュ」と「シ」以外には、完全に「ス」と聞こえる「スクダイ」という発音も聞かれたが、数値的にはほとんどゼロに近い状況であった。

男女別に見ると、男女とも本来の「シュ」の発音がきわめて優勢であり、男女差もほとんど見られないと言ってよい状況である。

年齢層による違いが顕著に見られる。どの年齢層も「シ」よりも「シュ」の方が優勢である。数値が最も低い70代でも「シュ」は6割を超えているが、一方で「シ」の発音も約3割認められる。この「シ」の発音は、若年層になるに従いほぼ一貫して減少し、これに代わって本来の発音である「シュ」がほぼ一貫して増加する。特に40代以下では「シ」は1割程度にまで縮小し、「シュ」の発音が大半を占める。この年齢差は、おそらく「シ」から「シュ」への変化（回帰という形での変化）が現在進行中であることを反映している面が強いものと考えられる。40代以下では「シュ」がほぼ定着している。

地域別に見ると、どの地域も「シュ」の発音の方が優勢であるが、回答者数が比較的多く従って数値が安定していると考えられる地域の中で「シ」の数値が他よりも相対的に高めであるのは、首都圏と関東、九州である。相対的に「シ」がよく用いられているこうした地域であっても、「シ」と発音している人の割合は2割程度にまで縮小している。

相対的に「シ」がよく用いられる地域のうち首都圏について、「シュ」の方で発音した回答者の数値を全国平均と比較して示したのが図4である（図6の「★首都圏（317人）」の方を示す）。

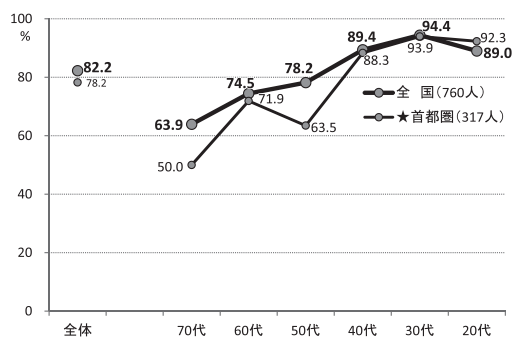


図7 「宿題」の「シュ」の全国と首都圏

これによると、70代と50代では、首都圏の「シュ」の数値は全国平均よりも1～2割低く、首都圏では「シュ」への変化が多少遅れていることが確認される。逆に言えば「シ」の発音が全国平均よりも高いということである。ただし、全国において「シュ」への変化が完了の一手手前となる40代以下では、両者の数値的異なりは解消される。

久野マリ子編著（2018）の言語地理学的研究では、首都圏における拗音の直音化を把握

する項目として「出張」「下宿」「寿命」「新宿」が調査されているが、分布図を見ると、高年層と比較して若年層では「シ」「ジ」で発音する地点が明確に減少する傾向が認められる。地点数という点からも、江戸訛りの残存である「シ」「ジ」は縮小し、「シュ」「ジュ」が一般化しつつあることが確認される。

首都圏における拗音の直音化については近藤康弘・月本雅幸・杉浦克己編著（2005）の解説がある。東京下町の発音として明治以降も行われた「江戸訛り」の一つに「シュ」「ジュ」を直音「シ」「ジ」で発音する傾向があるとした上で、こうした発音は明治以降減っていき、昭和期に入ると「シンジク」（新宿）のように拗音で発音するのが普通となり、現在ではあまり聞かなくなったとする。そして、こうした変化が生じたのは、言葉を耳で聞いて覚えるのではなく漢字を見て発音する習慣が強くなったためであろうと推測する。

この拗音の直音化という現象をめぐっては、「シクダイ」のような発音を公共放送において許容すべきか否かについての議論がなされている。山下洋子（2017）は、「新宿」の「シンジク」、「宿題」の「シクダイ」のような拗音の直音化が、1960年の放送用語委員会での決定以降アナウンサーの発音として許容されてきたが、そのことについての見直しは平成28（2016）年12月の放送用語委員会において議論されたこと、これを見直すことについては異論がなかったことを報告している。その議論の中で荻野綱男委員は、直音化した音を使う人がいなくなってきたことの原因として、ふりがなで「しゅ」「じゅ」と書くようになるのだんだんとその発音が正しいという気になってくるためではないかとし、ふりがなによる教育の影響を指摘している。

今回の調査でも、「シクダイ」という直音化した音を用いる人は、全国で2割程度にとどまっていることが確認された。おそらくかつては現在以上に普及していた可能性が考えられる「シクダイ」という直音化した発音は、年齢層別に見ると、現在では衰退に向かい、これに代わって本来の「シュクダイ」が再び定着しつつある状況が確認された。こうした回帰としての変化が生じた背景には、先行研究が指摘するように、言葉を耳で覚えるだけでなく文字を通して覚えることが普通であることや、学校教育における正書法の指導の効果などが要因として大きいものと考えられる。

4. まとめと今後の課題

最近実施した全国および北海道（札幌市・釧路市・富良野市）での多人数調査、そして1985年に札幌市で実施した多人数調査の結果から次のことが明らかになった。

(1) 直音の拗音化について

「20分」を本来の直音「ニジップン」と発音するか、それとも拗音化した「ニジュップン」と発音するかを調査したところ、全国では「ニジップン」が約2割、「ニジュップン」約7割であり、現在では拗音化した「ジュ」がかなり定着していることが確認された。

年齢層による違いが顕著に見られた。70代では本来の「ジ」の方が多いものの、若年層になるに従い「ジ」はほぼ一貫して減少し、逆に「ジュ」がほぼ一貫して増加する。特に30代以下では「ジ」が1割を切り、ほとんどの人は「ジュ」と発音している。この年齢差は、「ジ」から「ジュ」への変化が現在進行中であることを示している面が非常に強いものと考えられる。30代以下では「ジュ」がほぼ定着し、変化完了の一手手前まで来ている。

地域別に見ると、本来の「ジ」の数値は中国・四国・九州において他の地域よりもやや高く、これらの西日本では「ジ」が保たれる傾向が見られる。

新しい「ジュ」の発音は都市部に多いのではないかと推測したが、顕著と言えるほどの違いはなかった。ただし、首都圏について年齢層別に見ると、上の年齢層においては「ジュ」の数値が全国平均よりも1～2割高く、「ジュ」への変化が多少先行している。

「ジ」から「ジュ」への変化が生じた原因については、先行研究も指摘するように、助数詞等を伴わずに単独でも用いられることから“基本形”と意識されやすい「十」の発音「ジュウ」への類推によるところが大きいものと考えられる。

こうした「ジ」から「ジュ」への変化は北海道の札幌市・釧路市・富良野市でも見られた。いずれの地域も、60代以上では「ジュ」よりも本来の「ジ」の方が優勢であり、とりわけ70代でその傾向が顕著に見られた。これが若年層になるに従い「ジ」はほぼ一貫して減少し、逆に新しい「ジュ」がほぼ一貫して増加する。中でも60代から50代にかけての変化がいずれの地域においても著しく、この点が北海道の特徴として注目される。

札幌市について1985年の調査との比較を行なったところ、30代～50代における「ジュ」の数値の上昇が著しいことがわかった。「ジ」から「ジュ」への変化は、特にこの年齢層において大きい。ただし、これを回答者の生年層別に組み替えて分析したところ、同じ生年層の数値は両調査でおおよそ重なっており、同時期に出生した回答者群においてはこの間の変化ほとんど見られないことがわかった。このことは、「ジ」から「ジュ」への変化は、個人の中では年月を経ても基本的に生じないということを示唆するものと考えられる。逆に言えば、「ジ」から「ジュ」への変化は、その社会の世代の入れ替により進行し定着に向かうところがきわめて大きいものと考えられる。

(2) 拗音の直音化について

「宿題」を拗音を含む「シユクダイ」と発音するか、それとも直音化「シクダイ」と発音するかを調査したところ、全国では「シユクダイ」が約8割、「シクダイ」が約2割であり、現在は本来の「シュ」の発音がきわめて多いことが確認された。歴史的に見るならば、もともとは「シユクダイ」と発音されていたところに直音化した「シクダイ」が生じ、それが再び本来の「シユクダイ」に回帰しつつあるものと考えられる。

年齢層による違いが顕著に見られた。どの年齢層も「シ」よりも「シュ」の方が優勢であるが、若年層になるに従い「シ」はほぼ一貫して減少し、これに代わって本来の発音である「シュ」がほぼ一貫して増加する。特に40代以下では「シ」は1割程度にまで縮小し、「シュ」が大半を占める。「シ」から「シュ」への変化が現在進行中であることを反映しているところが大きいものと考えられる。40代以下では「シュ」がほぼ定着している。

地域別に見ると、どの地域も「シュ」の方が優勢であるが、他よりも相対的に「シ」が高めであるのは首都圏と関東、九州である。ただしこうした地域でも、「シ」は2割程度にまで縮小している。

このうち首都圏について全国平均と比較すると、70代と50代では「シュ」の数値が1～2割低く「シュ」への変化が多少遅れ、逆に「シ」が全国平均よりも高いことがわかる。ただし40代以下では、全国平均との数値的異なりは解消される。

かつては現在以上に普及していた可能性が考えられる「シクダイ」という発音が現在は

衰退に向かい、これに代わって本来の「シユクダイ」が再び定着しつつあるのは、こうした言葉を耳で聞いて覚えるだけでなく文字を通して覚えることが今では普通であること、また学校教育における正書法の指導の効果などが要因として大きいものと考えられる。

本稿では、「20分」については拗音化した「ニジュップン」という新しい発音が、また「宿題」については拗音を含む本来の「シユクダイ」という発音に回帰する形でそれぞれ普及し、現在かなり定着している状況を明らかにした。

しかしながら、調査における設問数の制約から、実際に調査できた語はそれぞれ1語にとどまらざるを得なかった。変化の度合いは語により異なることも考えられることから、今後は該当する複数の語を、相互の関連性を考慮しつつ調査する必要がある。

また、今回調査した語も、その後さらに変化している可能性はおおいに考えられる。全国調査からは約10年が経過しているが、たとえば地域を首都圏等に限定するなどして追跡調査することも望まれる。

注

- 1 動詞「言う」およびそれが形式化した「いう」のさまざまな活用形において、語幹「い」を「イイマス」のように「イ」で発音するか、それとも「ユウ」のように「ユ」で発音するかについては、テレビドラマの役者の発音を分析した尾崎喜光（2017）がある。
- 2 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語生活グループの研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究（日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究）」（2006年度～2009年度前期）の一環として、研究課題「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」により実施されたものである。
- 3 大学共同利用機関法人国立国語研究所の朝日祥之准教授をリーダーとする独創・発展型共同研究プロジェクト「接触方言学による「言語変容類型論」の構築」（現在終了）の一環として実施されたものである。筆者は共同研究員として本研究プロジェクトに参画し、北海道調査の企画・実施・分析を朝日祥之氏と共同で行なった。
- 4 札幌市と釧路市における「20分」の発音については朝日祥之・尾崎喜光（2014）で簡単な中間報告を行なっている。生年層別の分析から「ジ」から「ジュ」への変化が抽出できること、この変化は昭和20年代生まれと昭和30年代生まれとの間におこったこと、昭和30年代生まれ以降では「ジュ」が優勢であることを指摘している。

参考文献

- 朝日祥之・尾崎喜光（2014）「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その3 —音韻・アクセント項目から見—」『北海道方言研究会会報』91
- 尾崎喜光（2015）「全国多人数調査から見るガ行鼻音の現状と動態」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』39-1
- （2017）「「言う」の発音に関する研究」『清心語文』19
- 久野マリ子編著（2018）『新 東京都言語地図 音韻 —平成初期の東京のことば—』（非売品）

- 近藤康弘・月本雅幸・杉浦克己編著（2005）『＜放送大学教材＞ 新訂 日本語の歴史』（放送大学教育振興会）
 〔「13 明治時代以降の日本語 文字・音韻」の章〕
- 斎賀秀夫（1977）「連載・現代国語の力だめし（12）発音に揺れのある言葉」『実用現代国語』12
- 田野村忠温（1990）「現代日本語の数詞と助数詞—形態の整理と実態調査—」『奈良大学紀要』18
- 丹保健一（1991）「「十本」は「じっぽん」か「じゅっぽん」か—「十」の仮名表記と発音をめぐって—」『金
 沢大学語学・文学研究』20
- 文化庁編（1995）『言葉に関する問答集 総集編』（大蔵省印刷局 [現・国立印刷局]）
- 山下洋子（2017）「放送用語委員会（東京） 第1409回放送用語委員会—「新宿」は「シンジユク」か「シ
 ンジク」か—」『放送研究と調査』67-3